異世界ガンダールヴ記

天空城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界ガンダールヴ記

【Ｎコード】
Ｎ５７２４Ｉ

【作者名】
天空城

【あらすじ】
原作を知ってる主人公が、少し原作に沿いつつ、自分のやりたいようにストーリーを展開していくお話です。

召喚（前書き）

初めて書きました。
点数をつけるとしたら、
１００点満点中５点程度しかとれそうにないレベルですが、なるべくよい作品にして完成させたいので、ご意見、感想がありましたら参考にさせていただくのでどうか温かい目でご覧くださいませ。

召喚

「あんた誰？」

透き通るような青空をバックに、俺の顔をまじまじと覗き込んでいる少女が言った。

俺より大分年下に見える。１５、６歳か？

黒いマントの下に、白いブラウス、グレーのプリーツスカートを着た体を屈め、俺の顔を覗き込んでいる。

顔は非常に整っているが、髪は奇妙な桃色がかったブロンドの髪だ。

透き通るような白い肌と鳶色の目が印象的である。

外国人だろうか？

いや、日本語を喋っているからハーフかもしれない。

しかし彼女が着ている服はコスプレっぽいな。

秋葉原か？

俺はどうやら仰向けに寝転んでいるらしい。顔を上げて辺りを見回すと、黒いマントをつけ、自分を物珍しそうに見つめている外国人がたくさんいた。

草原が広がっているのが見える。

遠くにファンタジー映画で見たような、石造りの大きな城が見える。

ふむ……。

確かこの状況は、ゼロの使い魔で読んだことがある。
しかしなぜ、本の中の世界のような場所にいるのかさっぱり理解できないが……。

それこそ才人のように映画か、ドッキリを疑う。
まぁ映画もドッキリも、ゼロの使い魔ほどの有名な作品、ありえないわけじゃない。
このルイズ似の娘は、キャラにぴったりの娘をカツラとカラコンで仕立てたと考えられる。
だが、映画なら才人役に俺じゃなく、台本読み込んだ若い俳優のはずだ。
ドッキリもいまいち考えにくい。
そんな事を考えていると、
「誰って聞いてるんだから早く答えなさいよ！！
平民！！」
出た。
平民発言。
だが、考えてて無視し続けたのはこっちだ。
素直に謝ろう。
「いや、すまなかった。
俺は仙道豊（ゆたか）、
ああ、名前が豊だから、
ユタカ・センドーだ」
「ふん、どこの平民よ」
ハルケギニアとは違う世界の平民です。
なぜこの状況かは、
取り敢えず後で考えよう。
「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出してどうするの？」誰かがそう言うと、俺とルイズ以外の全員が笑った。
「ちょっと間違っただけよ！」

目の前のルイズが怒鳴った。
耳元で大声出すなよ。
うるさいから。
「間違いって、ルイズはいつもそうじゃん」
「さすがはゼロのルイズだ！」
どっと人垣が爆笑する。
「ミスタ・コルベール」
と小説通り進んでいく。

さて、取り敢えずドッキリの線も消えただろう。
ルイズは演技ではなく本気で怒っていた。
これほど若い女の子の演技なら自分程度でも見破れる。
本当に俺は異世界に来てしまったのかもしれない。
それも、よく知る世界に。
俺の額にルイズの杖が置かれる。
『コントラクト・サーヴァント』に移るようだ。ルイズの顔が近づき、俺と唇が重ねられる。
キス自体は初めてじゃないが、人に見られながらするのは何となくむず痒いな。
「終わりました」
唇を放し、真っ赤になりながらコルベールに言う。
キスでそんなに顔赤くするなよ。
いや、ファーストキスだし、無理ないのか？
コルベール先生は人の良さそうな中年親父だ。
頭が輝いて、非常にまぶしい。

「『サモン・サーヴァント』は何回も失敗したが、『コントラクト・サーヴァント』はきちんとできたね」
コルベールは嬉しそうに言う。

また数人の生徒がルイズを馬鹿にしたが、
俺はルーンが刻まれるのを身構えていたので耳に入ってこない。覚悟してても体が異様に熱くなり始め、
「ぐぅっ！」と呻き洩らさずにはいられない。

ルイズはどうでもよさそうな声で、
「すぐ終わるわよ。
その位我慢しなさい」
と言った。
その位って！！
一瞬ぶん殴りたくなったが、なんとか怒りを抑えて熱さが治まるのを待つ。
そう言えば一巻のルイズはこんな奴だったな。

平静を取り戻した体は安堵し、左手の甲にルーンがあるのを確かめる。
やっぱ俺はガンダールヴか。
コルベールは
「珍しいルーンだな」
と興味深そうに言った。
その後、ルイズ以外の全員が空を飛んで学院に戻っていく。
ルーンといい、魔法といい、映画とかの線は完全に消えたな。ルイズは二人きりになると、ため息をつき、俺に向かって怒鳴った。

「あんた、なんなのよ！」
俺は立ち上がりながら答えた。
「なんなのって、君が召喚した使い魔だ」
「なんであんたみたいな平民が使い魔なのよ」
「どうせ呼ぶならドラゴンとかがよかったか？」
「ええ、そうよ。あとマンティコア、グリフォンとか」

「せめてワシか、フクロウだろ？」
「……あんた随分と私の好みを理解してるわね？それは使い魔としての力？」
そりゃ一巻で君が言ってたから知ってるさ。
ルイズのことは大抵の事は知ってる。
ヒロインだし。

「いや、メイジが欲しがる使い魔ってそんなもんでしょ」「ふーん。あんたなかなか頭が回りそうね。
まぁ馬鹿を召喚するよりはましか……」
「そんな大したもんじゃない」
「まぁいいわ。
それよりその口のきき方改めなさい。
平民が貴族に対等な口をきこうなんて、百万光年早いわよ！」
「断る。俺は尊敬できる人間にしか礼を尽くそうと思えない」
ルイズは眉をつりあげて、
「主人で貴族の私に、平民で使い魔のあなたは無条件で尊敬しないといけないのよ！」
と怒鳴った。
「取り敢えず学校に戻らないか？」
俺は無視して、魔法学院と思われる、石造りの城に向かって歩きだした。
そばに落ちてる自分のノートパソコンとバッグを拾い上げる。「待ちなさい！主人にそんな態度でいいと思ってんの！」「ちなみにさっきは指摘しなかったが、光年は距離で時間じゃない」
後ろからついてきながら叫び散らすルイズに、適当にあしらいながら足を進めていく。

召喚（後書き）

とりあえず一話目投稿完了です。感想ありましたらどうぞ！

紹介と回想

仙道豊。
大学二年の二十歳。
身長百七十五センチ、体重六十八キロ、細いが筋肉はそれなりについている。
周りの自分への印象は『大人びた感じだけど何考えてるか分からない人間』
実際は何も考えてないだけだが、周囲はそう感じるらしい。

召喚される前は喫茶店で、大学のレポートをノートパソコンで書いていた。
パソコンで資料を探しているとき、妙な画面が出てきた。
画面の中央に、光る楕円形が映し出される。
その他に、説明などは特に何もないようだ。
ちょっとした興味本位で、その楕円の中央をクリックした。
その瞬間いきなりディスプレイが光を放ったかと思うと、徐々に俺の意識は薄れていった。
これが俺の召喚される前までのいきさつだ。

「で、俺は何をすればいい？」
学院に着き、
ルイズの部屋でテーブルを挟んだ椅子に腰掛け、今後の話をする。
「使い魔が一般的に何をするのか知ってる？」
「一応な。確か、主人のもう一つの目と耳になる能力が与えられるとか」
実際は、俺がルイズのみているものを見れるんだが。
「でも、あたし何も見えないしあんたじゃ無理みたい」

「男の裸を見ることにもなるんだぞ。見えないほうがいいと思うけど？」
とからかう。

ルイズは多少赤くなりながらも無視して話を進めていく。
「あと秘薬の材料とか主人の役に立つものを見つけてくるわ」
「秘薬って、コケとか硫黄だろ。
硫黄はともかく、コケならその辺にあるだろうに」
「……あんた、本当に色々知ってるわね。
平民は秘薬って言葉は知っててても、それがどんな物で作られるかは、あまり知れ渡ってないと思ってたのに」
ルイズは自分が召喚した平民が思いの外、博識なことに驚いたようだ。

「平民の中には、それらを採集して貴族に売って生活してる奴もいる。
秘薬の事を何も知らない奴はよほどの田舎者だ」
実際にゼロの使い魔でそんな描写はなかったが、きっとそんぐらいしてる奴はいるだろうと推測する。
俺が秘薬を知ってるのはまた別の理由だけど。
ルイズは感心したように言った。

「へぇ、じゃあんたも秘薬の材料を売って生活してたの？
なら案外役に立つかも」
「悪いが、知識はあるが、それで商売をしてたわけじゃないから見つけてくることはできないぞ」首を横に振りながら答える。
「……何よ、期待させないでよ」
心底落胆した表情を見せるルイズ。
「勝手に期待するなよ。
で、あと使い魔は主人を守る役目がある、違うか？」

「そうそれが一番大事な使い魔の役目よ。
でも、あんたじゃ無理ね……」
「そんなに弱そうか？
一応鍛えてるんだけど？」
今の俺は、武器さえ持てば七万の軍勢も止めれる。
……自分も力尽きて死ぬけど。
しかし、ガンダールヴの効果なしでの自分の実力は、大したことはないだろう。「そんな細い体で戦えるとは思えないわね。
だから、あんたに出来そうな事をやらせてあげるわ。
洗濯、掃除、その他雑用」
「それは別に構わないが、生活の面倒は見てくれるのか？」
「しょうがないわよ。あんたが死なないと別の使い魔も召喚できないし……」
「次に召喚しようとしてもうまくいかないかもしれないしな」
「何であんたにそんなこと指摘されなきゃいけないのよ！」
「聞いてた限りじゃ、
俺を召喚する何回も失敗してたみたいだな」
図星を突かれ、怒鳴るルイズに、
俺はさらに追い打ちをかける。
ルイズを怒らせても良いことは一つもないが、主導権をとっておかないと後々苦労するだろうし。「まぁ出来る限りのことはしてやるが、あまり上から、ものを言うのはやめてくれ。
腹が立つ」
「貴族に向かって口の聞き方がなってないわよ！」
「俺はこの世界の人間じゃない。
貴族なんていない世界から来た」
別世界から来たことの説明をする。

この世界が小説で読んだ世界であることは伏せたが。

「意味が分からないわ、証拠でもあるの？」
「証拠になるかは分からないがこれを見ろ」
ノートパソコンを起動して見せる。
小説通り信じきれないようだが、そこは無理やり押し通した。

「一応、公式の場では口調も改める。
あと関係者や知り合い以外には使い魔ではなく、従者として説明してほしい」
「何で？」「使い魔を人として認識しない人は多いんじゃないか？だからだ」
「まあ別にいいけど……。
それにしてもさっきのあんたの説明では、あんたの世界にはメイジも貴族もいないんでしょ。
何でこっちの世界のことに詳しいの？」
ルイズは不審気な目でこちらを見る。
「あっちの本の中には、魔法使いが出てくる物語が結構あるからそれを参考にして喋ってた」
「じゃ、あんたの世界にもメイジはいるんじゃない？」
「可能性はあるね。
そういう伝承は結構あるし」
「まっいいわ。続きはまた明日にしましょ。眠たくなってきたわ」
大きく欠伸をするルイズ。
「了解。朝になったら起こす」
腕時計は一時を指している。
時間が多少ずれているかもしれないが、隣が起きはじめたら起こせばいいだろう。
どのみち、今夜は眠らずこれからのことを考えなくてはいけない。

服を脱ぎ終わったルイズに、パンツとキャミソールを渡され、洗濯を命じられる。
服を男の前で脱ぐ危険性を論じようかと思ったが面倒だし、目の保養がなくなるのは嫌なので黙っとく。

ルイズは、体型はスレンダーだが、肌の艶や腰のくびれは、年頃の女の子の魅力は十分有している。
ルイズはベッドの中に入り、パチンと指を弾くと、ランプの灯りが消えた。
ベッドでごそごそ動いていたが、すぐに寝入ったようだ。

さて、これからどうしようか。今頃、喫茶店では警察とかで大変なことになってるんだろうな。

一人暮らしだから親は、当分気付かない。

まぁ放任主義だし、信頼されてるから、さほど心配されることもないだろ。
双月を見上げながら沈思し、ハルケギニアでの最初の夜が過ぎていく。

紹介と回想（後書き）

多分色々おかしい部分があるはず。
なのでそのうち書き換えるかもしれません。

キュルケと朝御飯（前書き）

少し文を変えました。
一人称だと案外やりにくいので。
もっと文章力が欲しいです……。

キュルケと朝御飯

ハルケギニアの夜が明けた。

豊は椅子から立ち上がり、体をボキボキとならす。

一晩中座って考えていたため体中からよい音がする。

……さてと、

ルイズを起こす前に、豊は洗顔、歯磨き用の水を汲みにいく。

……確か原作では下のほうにあったな。

ついでに洗濯物も洗うか。

ルイズが脱いだパンツやらを拾い上げる。

幸い水汲み場はすぐに見つかり、すぐ近くには洗濯用の桶らしい物があったので、豊は早速パンツとキャミソールを洗ってしまう。

地球なら洗濯機に入れるだけでよかったが、ハルケギニアでは洗濯板ぐらいしかない。

春とはいえ、水もまだかなり冷たく一分もしないうちに、手が真っ赤になる。

「いくら何でも、これは……」

豊はパンツが異様に汚れているのに気づき、顔をしかめる。

パンツには黄色い染みと、血が固まったようなものがこびり付いている。

もしかすると彼女は今、俗に言うアノ日なのかも知れない。

豊は、こんな汚れたパンツを人に洗わせるルイズは、

俺を同じ人間としてみていないんだな。俺なら死んでもこんな汚いパンツ、人に見せたくない、と思った。

ハルケギニアの文化には生理用品はまだ存在しないのかもしれない。

……近いうちに生理用品でも作って商売しようかね。
そんなことを考えながらも洗い終わり部屋に戻って、まだぐーすか眠っていたルイズを叩き起こす。
「な、何よ！なにごと！」「朝だ、起きろルイズ」
「はえ？そ、そう……。
って誰よあんた！」
まだ寝ぼけてるらしい。
普段は整った顔も寝起きでくしゃくしゃで、見れたものじゃない。
「使い魔」
「ああ、そういえば昨日、召喚したんだっけ」
ルイズは起き上がると、大きなアクビをした。
「じゃあ着替えるから服の用意をして」
ルイズが命じる。
「これが制服か？」
椅子にかかった制服を拾い、ルイズの横に置く。
「下着」
クローゼットの一番下だったか？
引き出しをあけ、下着を適当に選んで、後ろに投げ渡した。
下着を身につけたルイズが、再びだるそうに呟く。
「服」
「着せろと？」
「そうよ」朝から人使い荒いルイズに呆れながらも、女子の生着替えは眼福なので文句一つ言わずブラウスを手に取り、着替えを手伝う。
原作の才人は男扱いされてないと嘆いていたが、現時点では、ルイズは豊を使い魔としか認識していないことは分かっているため、嘆いても仕方ない、と豊は考える。
ついでに洗顔と、髪を梳かすのを手伝い、ルイズと部屋を出ると、隣の部屋から美人の巨乳が出てきた。

キュルケだ。
褐色の健康的な肢体は、見る男全てを魅了する色気を放っている。
バストがルイズと桁違いだ。
彼女はルイズを見ると、にやっと笑った。
「おはよう。ルイズ」ルイズは顔をしかめると、ものっ凄く嫌そうに挨拶を返した。
……本当にキュルケのことキライなんだな。
「おはよう。キュルケ」
「あなたの使い魔って、それ？」
俺を指差して、バカにした口調で言った。
キュルケは平民（？）を呼んだルイズをバカにした後、自分の使い魔たるフレイムを呼び出した。
開けっ放しのキュルケの部屋から赤く巨大なトカゲが現れた。
「これはサラマンダーか？これほど鮮やかで大きい炎の尻尾からして、多分火竜山脈のサラマンダーだな」
原作知識を披露して、豊は軽くフレイムの頭をなでてみる。
「へぇあなた平民なのに物知りね。
ええ！フレイムは間違いなく火竜山脈のサラマンダー。ブランドものよー。好事家に見せたら値段なんかつかないわよ？」
「そりゃよかったわね」
苦々しい声でルイズは答えた。
「素敵でしょ。あたしの属性ぴったり」
「キュルケさんの属性は『火』？」
ほんとは最初から知ってるが、本人から教えてもらった方が都合がいいので、豊はキュルケに問いかける。
「ええ！微熱のキュルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱。でも、男の子はそれでイチコロなのよ。ルイズ、あなたと違ってね？」
ルイズに向き直って、挑発する。
何やら言い返しそうなルイズに先んじて、豊は自己紹介をする。

「ユタカ・センドーです。ルイズの使い魔をやってるんで以後よろしく」
「ユタカ・センドー？
変な名前」「かもね」
「じゃあお先に失礼」
そう言って、キュルケはフレイムとともに去っていく。
キュルケが完全に見えなくなると、ルイズは怒鳴り散らし豊に八つ当りする。
「くやしー！何であのバカ女がサラマンダーで、私はあんたなのよ！」
「俺も勝手に召喚されて、結構困ってるんだが？」
「知らないわよ！そんな事。こっちだって平民なんて召喚したくなかったわよ！」
「はいはい。取り敢えず俺たちも飯食いにいこうぜ？」
「適当に答えるんじゃないわよ！」
……こっちは徹夜で、更に洗濯もして、腹が空いてるんだよ。
豊はルイズを無視して、先ほどキュルケが消えていった方に足を進める。
学院の食堂は、ハリポタのホグワーツっぽい構造だ。三つの長いテーブルに三色のマント別のメイジが座り、上にある中階に、教師らしき大人たちが、互いにくっちゃべっている。
ルイズにアルヴィーズの食堂の説明を受けながら、豊は命令される前にルイズの椅子を引く。
「気が利いてるわね」
「仕事はきっちりするって言っただろ」
豪華な料理に目を奪われながらも床に座り、目の前にあるとても侘しい皿を見てため息をつく。
「味はこの際どうでもいい、量をもう少し増やしてくれ」
「まぁ、真面目に使い魔やってるし、パンとハムぐらい増やしてあ

げるわ」
「もっとくれ。こんな量じゃそのうち栄養失調で倒れるぞ」
「使い魔を甘やかすと癖になるからダメ」ルイズはパン一個とハム一枚を豊の皿に落とす。
「食事の面倒は、約束のうちに入ってたじゃないか……」
ぼやきながら、豊は貧しいご飯を胃に納めていく。
一応、空腹を昼までごまかせる量を貰えた。
この昼にはシエスタと遭遇するイベントがあるはずなので、その後は飯は腹一杯食えるようになる。

授業とシエスタ

朝ご飯を食べ終えたルイズ達は、一度部屋に戻り授業の準備をする。
豊もバッグの中に何かを詰め込んで部屋を出ていった。

教室に入ると、先に来て座っていた生徒達が一斉にこちらを向き、
くすくすと笑いはじめる。
ルイズはそれらの声を無視し黙って席についた。
豊は自分のバッグに入れてきたクッションを床に置き、腰を落とす。
このクッションはルイズの物だが豊は気にしない。

中年のオバサンが入ってきて新学期の挨拶をする。
「おやおや、変わった使い魔を召喚しましたね、ミス・ヴァリエール」
シュヴルーズの悪意のない嫌味に教室中の生徒が爆笑する。

「では、授業を始めますよ。私の二つ名は『赤土』赤土のシュヴルーズです。『土』系統の魔法を、これから一年、皆さんに講義します」
授業が始まって自己紹介するシュヴルーズ。

……確かここでルイズと喋ってシュヴルーズ先生にあてられなくちゃいけないんだったな
原作を思い出し、その通りに進めようと豊はルイズに話しかける。

「スクウェアとかトライアングルって何？」
説明されてる途中、思った通りシュヴルーズに見咎められ、

「おしゃべりをする暇があるなら、あなたにやってもらいましょう」
爆発フラグがたったようだ。
豊はクッションや荷物が爆風に飛ばされないよう机の下に退かしておく。
「ルイズ。やめて」
キュルケが蒼白な顔して辞退を求める。
しかしながら、豊のご主人様は緊張しながらも
「やります」
と答え前に歩いていく。
豊も机の下に潜り込み、爆発音がした後、机から這い出て、
無残な姿をしているルイズに持って来といた替えのマントとスカートをはかせる。
…我ながらよくできた使い魔だ
豊は埃のまい上がった部屋の天井を見上げ、ため息をついた。恐らく今頃オスマン校長とフーケの掛け合いと、コルベールによるガンダールヴのルーンについて話し合ってる頃だろう。

やっと教室の片付けが終わり、昼ご飯を食べに行く。
豊は才人と違いルイズを挑発しなかったが、虫のいどころが悪いのか、昼を抜きにされた。しかし原作通りにシエスタに拾われ、賄いシチューに有りつく。
「おいしいよ。ありがと」
朝がアレだったので、このシチューはとても美味く感じる。
「よかった。お代わりもありますから。ごゆっくり」
…やっぱシエスタは優しいな、あの貧乳とは大違いだ。性格も胸もそんなことを考えながら、豊は三杯目のシチューを食べおわり、ご

馳走様をシエスタに告げた。「よければ、何か手伝わせてくれ」
シエスタは少し考え、
「なら、デザート運ぶのを手伝ってくださいな」
「分かった」

…いざ決闘イベントのフラグを立てに

「あ、シエスタ。よければ果物ナイフでもいいから貸してくれ」素手で決闘すると最初ボコられる為、豊はあらかじめ武器を準備する。
「果物ナイフですか？構いませんけど何に使うんですか？」
不思議そうな顔をするシエスタ。
「護身用。あと包帯も貸してほしい」
「？分かりました？これでいいですか？」
シエスタがナイフと包帯を差し出す。
「ありがとう。じゃ行きますか」

原作通りに事は進み（進め？）、ギーシュはケティとモンモンに振られ、豊に八つ当りをしてきた。
「君が軽率に、香水の瓶を拾ったせいで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」
ひどい言い掛かりだ。

豊は適当に話を進め、
ギーシュは先に広場に歩いていく。
シエスタは震えながら、豊を見つめ、

「あ、あなた、殺されちゃう……。
貴族を本気で怒らせたら……」
そう言って逃げていってしまった。
ケーキは配らなくていいのだろうか？

決闘の時にルーンが輝くのを人にあまり見られたくないので、
豊はルーンを隠すため包帯を左手に巻き始める。
そこにルイズがやってきて豊に決闘を思いとどまるように言ってきた。
正直豊にはいらないお世話だが、心配していってくれているので、
ここは誤魔化しておく。
「今更決闘を断ったら、ルイズにも恥をかかせることになるだろ？
大丈夫、ヤバそうだったらすぐに降参する」

「気を遣ってくれるのはありがたいけどね、怪我でもされちゃ、よけいに困るのよ！」
「なるべく善処する」
豊はルイズの怒声に軽く答える。

包帯を巻き終わり、見張りのギーシュの友人に案内されて歩きだす豊。
「ああもう！使い魔のくせに勝手なことばっかりするんだから！」
怒りながらもルイズも、後ろからついてくる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5724i/

異世界ガンダールヴ記

2010年10月15日23時14分発行